

立命館大学 国際言語文化研究所 ヴァナキュラー文化研究会シンポジウム

西欧の伝統に対するアフリカン・ディアスポラ文学の交渉と実践

NORTH AMERICA

EUROPE

—アメリカ、キューバ、ブラジルを例に—

2018年3月3日(土) 14:00-17:00

立命館大学 朱雀キャンパス 307 教室

パネリスト:

岡島慶 (目白大学)

アフリカン・ディアスポラ文学 (米国、アフリカ)

安保寛尚 (立命館大学)

ラテンアメリカ文学 (キューバ)

福嶋伸洋 (共立女子大学)

ブラジル文学・音楽

コメンテーター:

武井寛 (岐阜聖徳学園大学) アメリカ黒人史

司会: 坂下史子 (立命館大学)

問合せ先: ウェルズ恵子研究室 (wells@it.ritsumei.ac.jp)

近代世界のシステムは、西欧列強が植民地に張り巡らせたネットワークによって16世紀に成立した。そうしてできた「一つの世界」の文学の場には、西欧の伝統に根ざした排他的フレームが設けられており、「他者」がそこに参入するには「白い仮面」をかぶらなければならなかった。ポストコロニアル文学批評は、そのような西欧中心主義を脱構築し、正典の内外でひそかに響く異種の雑多な声をすくい取る試みを行ってきたと言える。

本シンポジウムが試みるのは、アメリカ、キューバ、ブラジルにおけるそのような例を、アフリカン・ディアスポラの声としてつなぎ、浮き上がらせることである。奴隷制によるアフリカ人の転地と離散は、近代世界のいたるところに別種のネットワークの種を蒔いた。そしてのちに、ボール・ギルロイが「ブラック・アトランティック」と呼んで可視化させた、交差的・横断的な黒人文化の再連結を準備したのである。南北アメリカ、カリブ地域に位置するこれらの3国は、地理的な隔たりと、言語や政治的・文化的コンテキストのちがいによっても分断されているが、そのような観点から黒人文化の連続性を観察することが可能になる。そこで本シンポジウムでは、それぞれの国における「黒人文学」が、「白人文学」との交渉においてどのような実践を行ってきたのかを分析することによって、西欧と性質を異にするアフリカン・ディアスポラの多様な伝統の表出を明らかにする。

まえがき

安保寛尚

本特集は、2018年3月3日に開催された、国際言語文化研究所・ヴァナキュラー文化研究会シンポジウム「西欧の伝統に対するアフリカン・ディアスポラ文学の交渉と実践—アメリカ、キューバ、ブラジルを例に一」の成果の一部である。

このシンポジウムの構想は、アメリカ、キューバ、ブラジル文学を専門として、各国の黒人文学に関心を寄せる3人が、合同で何か企画できないか話し合った場から生まれた。そこで提案されたテーマは、黒人の身体性や特殊な時間軸、レトリックなど多岐に渡った。けれどもそれらを結びつけるように思われたのが、西欧の伝統と交渉するアフリカン・ディアスポラの実践という切り口だった。奴隷制によって、アフリカ人は転地と離散を繰り返しながら、近代世界のネットワークに組み込まれた。しかし彼らの伝統は、決して切断・消滅することなく、西欧の伝統との交渉の中で更新・改変・再創造されてきたのである。アメリカ、キューバ、ブラジルにおけるそのような実践に注目し、アフリカン・ディアスポラの伝統の連続性や多様性を浮き上がらせることがこのシンポジウムの趣旨であった。

ここに掲載するのはまず、シンポジウムに登壇した岡島慶氏と筆者が当日行なった発表をもとに、これを発展させた論文である。岡島論文は、『見えない人間』の分析を通して、ラルフ・エリスンの思想がアメリカ国家主義的なものではなく、ディアスポラの歴史観に根ざしたリカバリーと自己再創造の物語であると説く。また、黒人音楽が生み出すダイナミズムが、偶発的な変容を遂げる共同体の未来像を描いていると指摘した。

拙論は、ヘンリー・ゲイツ・ジュニアの『シグニファイイング・モンキー』におけるレトリック理論の構築プロセスに注目した。ゲイツは、アフリカ、キューバ、アメリカの神話とトリックスターをつなぎ、レトリック原理によって接続されるアフリカン・ディアスポラのネットワークの地図を描いて見せた。この論文では、「中継地点」として挿入されたキューバの神話とレトリック原理としての統一性を批判的に分析し、その地図の書き換えを試みている。

そしてシンポジウムにコメンテーターとして参加した武井寛氏には、個別に論文を寄稿していただいた。武井論文は、アメリカの住宅政策と人種問題を扱っている。1937年に制定された連邦住宅法によるスラム・クリアランスなどの住宅政策は、郊外における画一的コミュニティの形成を促し、人種的・社会的隔離を進めた。そのような住宅問題に取り組む人々との関係によって、住宅改革家のキャサリン・パウアー・ウースターが、住宅と人種問題の意識をどのように変化させたのかを明らかにしている。

岡島論文と拙論を読み通すと、アフリカン・ディアスポラの歴史や伝統が、音楽、レトリック、神話、宗教など、ヴァナキュラーな文化実践において、ただ再現されるだけでなく、ダイナミックに再創造されていることに気づかされるだろう。武井論文はもちろん個別に読まれるべきではあるが、パウアーが住宅政策による人種隔離の深刻化を訴え始めたのは、エリスンの『見え

ない人間』が発表された1952年とおよそ時期が重なる。したがってその論考は、部分的にせよ、岡島論文で扱われるこの作品のコンテキストを補う役割を果たしている。

シンポジウムと本特集が、言語や分野を超えたアフリカン・ディアスポラ研究の発展につながることを期待したい。